

P1-039

乳児院への大学院生（心理学専攻）の受け入れに関する一考察

三宅 愛、福井 ひとみ

日本赤十字社医療センター 附属乳児院

【目的】

乳児院では被虐待児の入所が増加し、医療を必要とする子どもも多く入所している。専門的な対応、治療的機能の充実が必要となっている。

現状では、心理学を学ぶ学生が乳児院を知る機会はほとんどなく、施設として実習の受け入れは容易ではない。そのため、乳児院に就職する心理士は、現場に入ってから乳児院という施設について学んでいくことが多い。

A乳児院では心理職が行っているグループセラピーに、学生ボランティアや実習生（以下「学生」）を受け入れている。本発表では受け入れの取り組みと学生の思いを報告し、少しでも多くの学生に乳児院や児童福祉について知ってもらうために、乳児院心理士として何ができるか検討したい。

【方法】

対象は、A乳児院で行っているグループセラピーに参加した学生（終了3名、活動中4名 計7名）。

活動開始前に行うオリエンテーションでの発言、グループセラピー活動後に毎回行うカンファレンスでの発言、活動後に毎回提出するレポート、適宜個別で行う面接での発言、自由記載のアンケートの内容から考察する。

【結果】

活動を希望した学生は、乳児院についてはほとんど知らず、乳幼児に関わった経験も少なかった。ただ、どの学生も子どもは好きで、将来子ども関係の仕事をしたと思っていた。「抱っこの方がわからない」「泣いたらどうしよう」という不安も聞かれた。

活動開始当初は、子どもと接することについて不安や、時に怖さを感じていることがわかったが、子どもと関係が築かれる中で不安や怖さが少なくなり、楽しさや自信につながる様子が語られた。また、子どものかわいさ、笑顔が活動継続のモチベーションにつながっていることもわかった。

【課題と考察】

学生は、乳幼児への接し方以外に入所理由、保護者との関わり、感染症への注意なども必要で、さまざまなことに気を使いながら活動をする必要がある。より丁寧な事前オリエンテーションや、定期的な面接の必要性を感じている。

学生を受け入れること自体難しい施設が多いかもしれないが、乳児院での活動は乳幼児に直接触れることができ、福祉の現場を知る貴重な機会となるだろう。乳児院心理職の充実、児童福祉全体の充実のためにも、将来心理臨床を支える学生の受け入れを今後も継続していきたい。

P1-040

父親の育児参加に関する要因についての文献検討

藤澤 真沙子、尾近 千鶴、菊地 珠緒

川崎市立看護短期大学

【目的】

父親の育児参加に関わる要因について文献をもとに検討し、父親の育児参加への支援の課題を明らかにする。

【方法】

研究期間は平成27年10月～平成28年2月とした。Ciniiにて「父親」「育児OR子育て」「要因」をキーワードにし、2009年～2015年の文献を検索した。そのうち1.重複した文献を除外する、2.父親対象の研究である、3.日本における研究である、4.健康な子どもをもつ父親を対象にしていることを条件とし、47件の文献が該当した。さらに示説発表を除き、父親の育児参加の要因に関する文献7件を検討した。分析方法は1.対象の7件を一覧にまとめ概観した。2.7件の文献より父親の育児参加に関わる要因と思われるもので、有意差があるものを共同研究者で抽出した。3.抽出されたものをコード化（「」で表記）し、それをさらにカテゴリ化（【】で表記）し分析した。

【結果】

7件の対象文献から得られた父親の育児参加に関わる要因は、【父親の職場の時間的要因】では「労働・通勤時間」5件、「有給休暇の取得」2件、「育児休暇」1件、「時間のゆとり」1件であった。【父親に関する要因】では「平等的性別意識」4件、「育児への思い」3件、「母親から父親への情緒的支援」2件、「父親の役割感」1件、「父親の育児経験」1件、「出産立ち会い経験」1件、「妻の妊婦健診に付き添う経験」1件、「収入」1件、「役職」1件、「学歴」1件、「健康状態」1件であった。【母親に関する要因】では「妻の就労」1件、「母親の出勤時間」1件、「母親の職業」1件であった。【子どもに関する要因】では「子どもの年齢」2件、「児が第1子」1件、「児が男児」1件であった。【ソーシャルサポート要因】では「相談相手」2件、「親の同居」1件、「職場の人間関係」1件、に分けられた。

【考察】

父親の職場の時間的要因、母親の就労状況は、父親の育児参加に関係した。また、平等的性別意識、育児への思い、母親から父親への情緒的支援は育児参加に関係した。父親の意識に働きかけることが育児参加を促すために重要と示唆された。さらに、父親の育児経験や出産立ち会い経験などの経験も育児参加に関係した。父親の子育てに関する経験が育児参加を促すには必要であると考えた。また、相談相手、職場の人間関係が育児参加に関係した。子育てに関する相談ができるよう社会で働きかけていくことの重要性が示唆された。